

上原 昇（2組）

市村到君（４組、御代田町在住）の何冊目かになる著書が９月に上梓されました。

題名の『信州発 言葉の玉手箱』というネイミングが洒落ています。

<https://books.rakuten.co.jp/rb/18374915/>



『言葉の玉手箱』の表紙

市村君からの手紙には「第 1 部では、身近な言語を種々の観点から考察。第 2 部では実際の英語教室で教材をどのように扱ったかを紹介」とあります。

著者の長年の教育者としてのキャリアと、30 年間にわたって集めてきた「気づきノート」が言葉の玉手箱の源になっているようです。

前半の第1部では、読んでいて「成程!」「その通り!」と思わず相槌を打ちたくなる箇所がそこかしこに出てきます。後半の第2部は英語教育の歴史と展望など専門的な内容構成になっています。

中には、今年の4月に著者が「蕨の会」にゲスト参加した際に、甲府の酒折宮で目にした「片歌問答」について触れていたり、同期の友人の活動を紹介したりしているのも、読んでいて親しみがわきます。

特に言語（言葉）に関心のある方には、是非手にとって一読をお薦めします。

【原田義則(3 組)追記】

私も職業柄、常日頃から「ことば」には大いに興味を抱いています。方言や各言語間での個々の単語の概念の広さの違い、時代変遷、イントネーション・アクセント位置の変動など、著者が注目している点と同じところに私も興味がありますので「良くデータを収集したものだ!」と感心しながら、興味深く読ませて貰いました。

個々の単語の正しい（≡本来持っていた）意味合いからの変化、諺の意味の変遷、形容詞の程度の減少（低価値化、デグラデーション）などは日本語でも、他の言語でも経験することです。言葉は正に生き物で、時代に呼応して変化することは仕方ありません。「今の若者言葉は間違っている」とか「昔の使い方に戻せ」と言っても意味がありません。ただ、「単純な誤解に基づく意味合いの変化」には抗いたいと思っています。

尚、第2部は第1部とは取り扱うテーマが違い過ぎ、戸惑いが生じました。第1部と第2部は独立させた別の本にする方が良いのではないかと感じました。

(2025 年 10 月 2 日記、10 月 12 日追記)

以上